

「一発」の 段差釣り

最近の傾向

バラケとくわせの段差幅を広く取り、くわせに「一発」の角鈎を使った釣り方を、「一発の段差釣り」という。魚影の薄い釣り場や、食い渋り時に効果的で、バラバラとバラケる鈎の粒子とくわせの「一発」を同調させることがポイントになる。くわせのハリスが長ければ長いほど、バラケエサを持たせるようにして、バラケの煙幕の中にくわせエ

サが入らなければ効果は薄くなる。

そのため、上バリは通常より大きくして8〜10号位を使用し、反対にくわせエサのハリスは軽量で小さいものが適している。

アタリは、基本的には小さな「ツン」アタリではなく、へら鮒が「一発」を吸い込んで走るような大きく変化するものが多い。くわせのハリスも細いものを使用するので、強いアワセはラインブレイク

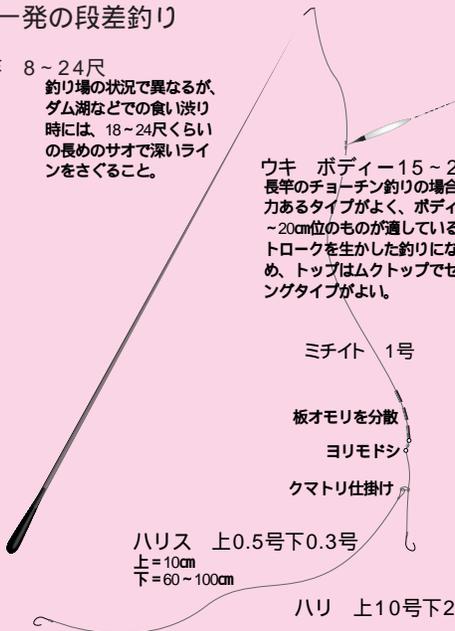


食い渋りに効果大の段差釣りは、バラケた粒子とくわせの「一発」を同調させるのがコツ。

一発の段差釣り

竿 8〜24尺
釣り場の状況で異なるが、ダム湖などでの食い渋り時には、18〜24尺くらいの長めのサオで深いラインをさぐる。

ウキ ボディー15〜20cm
長竿のチョーチン釣りの場合は浮力あるタイプがよく、ボディー15〜20cm位のもが適している。ストロークを生かした釣りになるため、トップはムクトップでセミロングタイプがよい。



クマトリ仕掛け



パターン 1

推薦釣法 = 浅ダナで釣る場合

バラケマツハ400cc +
段差バラケ400cc +
スーパーD400cc +
水200cc



くわせは「一発・極小」



+



+



+



エサの大きさ&オモリ量



エサのサイズ
直径2.5 - 3cm程度で
大きくハリ付けする。

板オモリ

実寸大

オモリの量 = 18 - 24尺ザオの場合
ウキの浮力の目安は、0.25mm厚の板オモリで
1.7cm x 6cmを2 - 3カ所に分散して付ける。

の原因にもなるから、そつと静かに合わせる程度でよい。ウキは、広くアタリを探るため、ストローク幅のあるセミロングタイプが釣りやすくボディーも浮力のあるものがよい。下ハリスが60cm以上と長くなると上ハリスとからむ場合が多くなる。そのようなときには、「クマトリ仕掛け」が安心で、イトヨレも防げる。タックルセッティングのポイントには、食い渋り時には下ハリスを細くしてより自然に

くわせエサの「一発」を落下させ、吸い込みやすくすることに尽きる。大きく硬めのバラケエサを使用するので、ウキが沈没することもあるが、そんなときは静かに穂先を持ち上げ、縦誘いを入れるとその動きに反応することも多い。盛期の食い渋り時に威力を発揮し、ポツポツと良いサイズを拾うことができ、チョーテン釣りが浅ダナまで活用範囲も広い。

パターン 2

推薦釣法 = チョーテンで釣る場合

バラケマツハ400cc +
新B400cc +
段差バラケ400cc +
軽さなぎ100cc + 水200cc

くわせは「一発・極小」



+



+



+



+



● エサ使いのコツ

【パターン 2、】ともにカタボソタッチが基本となる。粉のうちにエサボウルの中でよく混ぜ合わせ、水を加える。大きめのエサボウルを使用してネバリが出ないように大きく、均一にかき混ぜる。手を熊手状にして上から下へと全体に水がまわるようにしてそのまま放置。決して練りこまず、ボソボソの状態でよい。

ボソエサのためハリ付けが難しいので、エサ割れてしまうときには、両手の指を使用して

ていねいに付けるようにする。タナまでバラケエサが確実に持ち、なおかつゆっくりと落下するくわせの「一発」と同調させるには、このエサ付けもポイントとなる。特に、【パターン 2】のエサは、水分量も少なく「さなぎ粉」が入っているため、まとまりにくいが集魚性は極めて高い。タナでゆっくりバラケさせ、その煙幕に刺激されたへら鮒が、自然に水と共に「一発」を吸い込むように誘導されれば食いつながる。

エサを持たせたいときは、押し練りでエアを抜くようにすると、なじみ幅もエサ持ちもグンとよくなる。

一発の段差釣りこんな時どおする？

Q1
エサ割れてしまおうが
どうする？

A1
なじんだウキの戻りが早いときには、まず押し練りを加えてエアを抜いてみる。それでも割れてしまうときには両指を使ってしっかりと丸める。ハリが小さい場合も、ハリ抜けてしまうのでハリを大きくするのもポイント。割れてしまうからといってネバリの強いエサをブレンドしたり、手水を打ってネバリを出すよりも、基本的にはサラサラのボソを使用したほうがバラケの粒子がスムーズに拡散する。また、エサ付けの形も、抵抗を少なくするために丸くつけるのがよく、ラフに付ければ早く開いてしまう。

2

くわせの「一発」が取られてしまう

2

角獣の「一発」には色々な大きさがあるが、食い渋り時には小さいほうが適している。しかし、その反面「一発」が抜けてしまうこともあるので、そんなときには少量ずつ水に浸し、ハリ付け時に指先で揉むようにするとコシが出る。ハリも軸の細いものが適しているので、そのようなタイプを使用すると「一発」の抜けも防げる。また、「一発」を「さなぎ粉」の中に浸してから使用すると集魚性も高まり、食い渋り時に効く。



3

“縦サソイ” ってなに？ アタリは どんな感じ？

3

チョーチン釣りで、バラケエサの重さでウキが沈没したとき、静かに50cmほど穂先を持ち上げる誘い方を“縦サソイ”という。この動きに連動してバラケもくわせも持ち上げられる。食いアタリが出るのは、竿を元に戻してラインテンションがゆるんだときで、エサがフグリーになり自然落下した直後にアタることが多い。このときのアタリは、持っていくような変化（ウキがスーッと沈没していく）になるので強く合わせる必要はなく、そっと竿を立てればヒットする。そのアワセで食ってこないなら、再度、竿を元の位置に戻して次のアタリを待つ。この方法は、驚くほど効果的で、特にダム湖の食い渋り時の必釣テクだ。



4

エサの手直し、 使い方の コツは？

4

【パターン】のブレンドは、「段差バラケ」がエサ全体をつなく役割となっている。エサ持ちをブレンドで調整する場合には「段差バラケ」の量を多くすると持ちも良くなり、反対にボソツ気を強くしたいときには「バラケマッハ」を多くする。“一発の段差釣り”のバラケエサは、ヤワネバでエサを持たすことは少なく、バラケ方が不自然にならないようサラッとしたタッチで使用する。【パターン】のブレンドは、さらにボソツ気が強いタイプ。しっかりと圧を加えてハリ付けしよう。早いアタリで釣れるとバラケが残ってくるが全く問題ないので気にせず、同じタッチで釣り続けよう。やわらかいタッチにするとバラケエサに反応するようになり、かえってカラツンを誘発するので、この釣りではバラケエサを“へら鮒が嫌うタッチ”にすることがポイントになる。